

クラシック巡礼 10

# フランス・リストの軌跡

サイト掲載: [www.i-s-m-kk.co.jp/](http://www.i-s-m-kk.co.jp/)

2020年 7月 12日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

## フロローグ

フランツ・リストは、真正の作曲家ではない。どちらかと言うと演奏家すなわちピアニストとして前提に置けば、私には彼の軌跡が自ずと判り始めてきた。そうすると、クラシック巡礼として私が密かに掲げている作曲家20傑には入ってこない。ところが、巨神ベートーヴェンに、頭を撫でられた、あるいは、額にキスされたという伝説を持つ歴史上のクラシック音楽家はフランツだけなのである。こんな濃厚接触者は、19世紀の名作曲家たちがいかに威張りくさっても、他に誰一人もいない。だから、私のクラシック巡礼としては、何が何でもフランツの足跡を追わねばならないことになる。

作曲家と演奏家の違いは何だろうか。ベートーヴェンもモーツアルトも最初は演奏家だったが、作曲という創作に駆り立てたのは世の需要であろうか。どれもこれも同じように聴こえるバロック音楽が飽きられていたことは、当時の趨勢であった。19世紀の発明・発見の時代は、新しい何かを希求して止まない人間性がインフレーションを起こしたことは、誰もが認めざるを得ないであろう。現代は、悲しいことに飽和してしまって、そういった19世紀の芸術と科学の遺産を再利用しているだけなのである。すなわち、芸術・科学のビッグバンが緩やかな減速膨張期に入ってしまったのが、現代なのにならぬ。

フランツは、己の芸術の確立を先ずは演奏に求めたのである。現在の再利用文化と、一面で似ているが、彼はその彼岸に創作という芸術活動をビジョンとして持ったのであろう。30歳をはさんで8年間を欧州全都市を巡るリサイタル・ツアーに捧げた。とにかく、ソロ・コンサートを初めてリサイタルと称して、千回も弾きまくった。平均して3日に1回であるから、驚嘆に値する。人は、終えたあとに疲労困憊と虚脱感に苛まれたと言うが、私の考えは違う。フランツは、先の彼岸を見ていたはず。繰り返された演奏会の果てに、きっと創作という芸術への情熱が燃え滾るはずだと。それが証拠に、ツアーを締めくくったあとに、彼の作曲活動は300曲に及ぶほどの成果を上げている。

ただし、原作、編曲が入り乱れているのも確かである。すなわち、再利用という嗜好が演奏により醸成されたものとも推察できると同時に、現代につながる時代の趨勢が始まり出したことが覗える。後のドヴォルザークやバルトークに代表される民謡の採曲にこだわった作曲家に根を伸ばしていくのである。

フランツは、まさに作曲家兼編曲家の先駆けだったのだ。

%%%

フランツ・リストは作曲家というよりも音楽家というべきである。伝統的なピアノ・ソナタや交響曲に背を向け続けた。それらのジャンルでは決定的な傑作を残さなかった。つまり、編曲と標題音楽に嗜好が向いていたのである。それでも、演奏家で終わることなく、彼は創作という芸術活動に邁進した。

題名のない音楽を絶対音楽というらしいが、フランツも『ピアノ・ソナタロ短調 (S. 178)』を作曲して、出来上がった音楽の解釈を聴衆に委ねた。ただし、この曲とピアノ協奏曲 (S. 124) の題名が無い。私は、いずれもアルゲリッチの演奏を味わって、自儘な情操に浸ることができた。傑作であることは確かだ。

だが、彼はきらった。他のほとんどの曲には標題が付いている。

ベートーヴェンが描いた『交響曲第6番「田園」』は、見事に絵画的に仕上げられた。ベルリオーズもリストもこれに大きな刺激を受けた。しかしながら、「田園」に肩を並べても凌駕するものは作れなかった。ベートーヴェンの偉大さを証明することには貢献できた、ともいえる。

## ベートーヴェンとフランツ・リスト

<https://blog.goo.ne.jp/hirochan1990/e/311654ca117e6e28a73940d6f9e9ca7d>

「ベートーヴェンはピアノ教師として名声を博したチェルニーに対して常に愛着を示し、死ぬまで交わりを続けた。事実、チェルニーはこの偉大な先生の新作の校正をただけでなく、1805年に歌劇『フィデリオ』が上演された時には、特に命ぜられてそれをピアノ用に編曲した。そのほかその甥を教えることをベートーヴェンに依頼されたのも彼であった。これは1815年のことであった。甥を非常に可愛がっていたベートーヴェンは毎日のようにチェルニーのところへ来て、気の向いた時には忘れがたい素晴らしさで即興演奏をするのであった。

チェルニーの弟子には多くの逸材がいたが、中でも卓越していたのはリストであった。そしてリスト自身が老人になってから弟子の一人に語ったところによると、**彼をベートーヴェンのところへ連れて行ったのはチェルニーであった**。その時、リストはまだ11歳の少年であったが、バッハの遁走曲【=フーガ】やベートーヴェンその人のハ短調協奏曲(ピアノ協奏曲第3番ハ短調op. 37)の第1楽章を弾いた。すると弾き終った時、ベートーヴェンは少年の額に接吻して、

『君は幸福だ。そしてほかの人たちを幸福にするだろう。これほど結構なことはない』  
と優しく言ったそうである。」

## リサイタル

リサイタルとは、基本的にはピアノ独奏による演奏会のことである。そんなこと当然である。敢えて採り上げることもない、と思う人が私も含めて多いのは一般的であろう。ところが、フランツの演奏家生涯を追ってみると、「リサイタル」こそ、ヴィルティオーゾたるフランツ・リストの独奏演奏会スタイルなのであることが判った。

\*\*\*\*\*

1839年(28歳)3月8日、ローマにて西洋音楽史上初めてとなる独奏会をリストは開いた。6月8日ベルジョイオーソ侯爵夫人宛の書簡で、この時の様子を彼は語っている。

「音楽的独白……私は思い切って、完全に独りきりで演奏会を開きました。ルイ14世のように、聴衆に向かって騎士気取りで、『コンサート、それは我なり』と述べておきました。」

音楽之友社;作曲家◎人と作品シリーズ【リスト】福田弥著より

\*\*\*\*\*

このローマのリサイタルを皮切りに、フランツのマラソン・ツアーが始まる。もともと、コンサートとはコンチェルトとも呼ばれ、協奏曲や交響曲の演奏会が呼ばれていた。その合間に付け足しのように独奏が組まれていた。或いは、ヴァイオリン・ソナタやチェロを混ぜたピアノ三重奏曲などとの組合せによるプログラムが常套であった。つまり、当時は、単独では興業が成り立たなかったのである。それを可能としたのは、フランツの人気の凄さに依る。加えて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第29番「ハンマークラヴィア」のように1曲で45分もかかる大曲があって、レパートリーも自作、バッハ、ショパン、シューマンやメンデルスゾーンなど広範であり、様々な嗜好をもつ客層も広げると同時に十分にリサイタル演奏時間を満たすことができたからでもある。

結果として、彼のギャラは1回で1700フローリン(約340万円)ほどになったことから、月収としては、概ね3千万円にもなる。これだけで如何に彼が人気タレントだったか解り得よう。しかも、ソロなのでリハーサルは自分の練習だけである。コスト最低・売上最高なのである。協奏曲や交響曲が入ると、楽団員用の楽譜の写譜のほか、リハーサル会場の手配とスケジューリングなどが無用だから、興行主も、楽だったにちがいない。が、他にソロを可能とする演奏家は皆無だったことも貴重で、業界では隔絶的な存在だったことも肝に銘じていたことであろう。





[https://ja.wikipedia.org/wiki/フランツ・リスト#/media/ファイル:Liszt\\_\(Lehmann\\_portrait\).jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/フランツ・リスト#/media/ファイル:Liszt_(Lehmann_portrait).jpg)



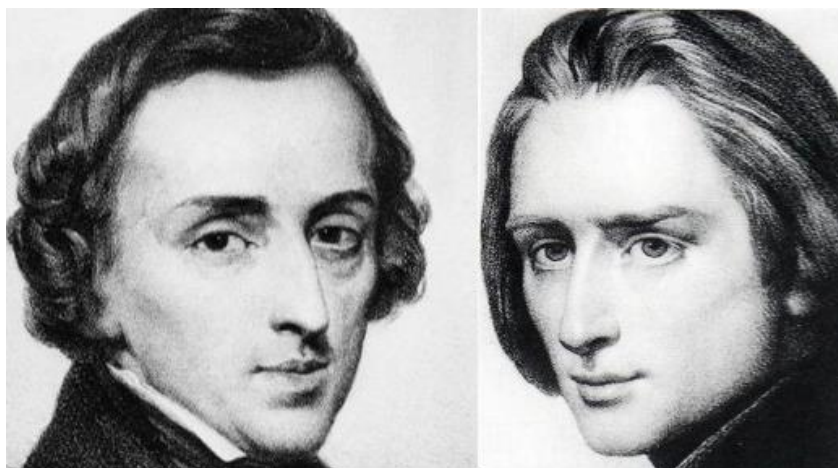
[https://ja.wikipedia.org/wiki/マリー・ダグー#/media/ファイル:Marie\\_d'Agoult\\_by\\_Henri\\_Lehmann\\_\(02\).jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/マリー・ダグー#/media/ファイル:Marie_d'Agoult_by_Henri_Lehmann_(02).jpg)

当時は、貴族の夫婦が別居するケースがありふれていた。その原因は別にして、とにかく暇をもてあます裕福な貴婦人のほうは、若く敏捷な燕を求めていた。さらに、演奏家としてのトップクラスのピアニストは狙い打ちにされたのである。貴族の館で催される夜会サロンに出かけ、自分の男趣味とエンターテイナーに即座になりうるツバメを見せびらかすことに、極上の享樂をおぼえたのであろう。すると、ピアニストとして目覚ましい人気を博していた彫の深いフランツは、またとない愛人として恋情を満たすと同時に、サロンにおける主人公気取りができることこそ、まさに、虚栄心を大いに満足させたことは想像に余りある。

ショパンも同様に、ジョルジュ・サンドにはまってしまったが、フランツにとっては、生涯を揺るがすライバルになった。知り合ったばかりに、一つ年上のショパンから提示された「練習曲: 作品10」を初見で躓<sup>つまづ</sup>いて弾けなかったことは、死ぬほど癩<sup>しゃく</sup>に障り、フランツは姿を消した。しばらくしてから、ショパンの前でドヤ顔で見事に弾いてみせたのである。フランツは己の演奏技術は絶対に誰にも負けてはいない、と思っていた。しかしながら、作曲という創造芸術に、いまいまでも、ショパンに対して強烈なコンプレックスに苛<sup>さいな</sup>まれたことも確かである。



## ショパンとフランツ・リスト



<http://foo-d.cocolog-nifty.com/blog/2018/08/post-e1bc.html>

マリー・ダグー夫人は、フランツのDNAを受けて1835年（フランツ：24歳）から2年毎に三人の子、長女、次女（コジマ）そして長男を産んだ。彼女は、虚栄以上に身も心もフランツに捧げた。しかしながら、子供たちの養育は、既にパリで暮らしていたフランツの母に放り投げ、子供たちの登録も偽名を使っていた。フランツはそれに<sup>こだわ</sup>拘らずに、優しく頼もしい母に、絶えず養育費を仕送りして依存した。

ショパンのほうは、ジョルジュ・サンドの虚栄だけに献じたことから、もてあそばれて淋しい不幸な結末を迎えた。ところが、天はショパンの作品たちにこの世のものとは思えないほどの甘美さを与えた。これに、絶望にちかい劣等を感じたのがフランツであったのだが。

### 【ヴィルティオーゾ行脚時代：1839年（28歳）～】

ショパンの飛び抜けた才能に痺れた<sup>しび</sup>フランツの審美眼も天与の資質だったのであろう。加えるに、彼には巨神ベートーヴェンの手を肌で感じた経験がある。あれは何だったのかと思ったにちがいない。

「私は何故ここにおり、何をしようとしているのか。大衆の喝采が何を私にしてくれるのか。空虚で他愛のない祝福について自問している。」と、マリー・ダグー夫人に書簡で嘆いたと伝え聞く。

悩み悶え<sup>もだ</sup>ながらも、ショパン芸術の美に感じすぎた。反発しながらも創作に対する情熱が沸いてくる。そのショパンに対抗して、フランツは消耗的なマラソン・ツアーに自虐的におのれを駆り立てたことは、容易に想像できるが、自信は満身にみなぎっていたにちがいない。

一方、マリー夫人とは次第に冷えていった。彼女は、創造という芸術家の<sup>いぼら</sup>茨の道に、理解が無かったのか、それとも、パリ社交界において誇らしげにフランツを従えて虚栄

心が満たされればいいと思っていたのか、わからない。

契機が訪れた。ハンガリーで大洪水災害が起こり膨大な復興資金が広く求められていた。これがフランツの祖国への愛国心と義侠心に火を点けたから、1838年(27歳)4月～5月にかけて、ウィーンにて慈善演奏会を10回も開いた。そして、24000グルデン(約1億円; 1グルデン≒4千円)をハンガリー政府に寄付できたのである。

この行動が、8年間にまたがるマラソン・ツアーをフランツ本人に燃え滾<sup>たぎ</sup>らせた。結果として、ヴィルティオーゾ行脚が始まった。しかも、ソロ・コンサートすなわちリサイタルという形態であり、今や当たり前ではあるが、当時は画期的なトライアルでもあった。演奏スタイルもピアノを聴衆に横に向けて、蓋を開けて音響を最大化したという。

レパートリイは、自作のほか、バッハ、ベートーヴェン、シューベルト、ウェーバー、ショパン、シューマンという作曲家の作品を主体に幅広く採り上げたようだ。

特に、ベートーヴェンでは、ピアノソナタ第29番「ハンマークラヴィア」(演奏時間:約50分)を1836年にパリで演奏したとき、聴衆は初めて聴く『巨大な建造物のような異次元の音楽に圧倒され、茫然とした』という。楽譜を見ながらこれを聴いていたベルリオーズは、あらゆる細部、一音符すら漏らさず、あらゆる指示を忠実に守り、完璧に演奏したと証言している。このようなベートーヴェンのピアノ曲演奏を何回かリサイタルで披露した。当時は、バッハやベートーヴェンピアノ・ソナタ曲を聴く機会は余りなかったから、フランツ・リストのリサイタルの価値に加えて、それ以上に、ベートーヴェンへの畏敬の念を身をもって表わして、ドイツの誇りを蘇らせたのである。

<https://www.cherry-piano.com/posts/6777341/>

ステージで華々しく演奏するリストと、うっとり見つめる女性たち。歓声をあげる女性たち。中には本当に失神してしまい、傍らの男性に抱きかかえられる女性もいる。これは、リストのベルリンでの演奏会の模様を、ドイツの挿絵画家テオドール・ホーゼマンが「ベルリンの現状と酒」という雑誌の口絵として描いたカリカチュアである。

カリカチュアは社会現象や世相を漫画風のユーモアで痛烈に皮肉った風刺画だが、単なる文字データよりも時代の空気をよりリアルに伝えてくれる。

もう一枚のとおきのカリカチュアがある。1842年に描かれた「コンクール」というタイトルの絵である。小さな札に「リストの忘れ形見」と書かれ、その下に、リストの私物である手袋、ハンカチなどの小物がぶら下がっている。これは5メートルほどの高さの柱の先端に括り付けられていて、それを奪おうとドレスに身を包んだ貴婦人たちが、必死に柱にしがみつ、よじ登ろうとしているというカリカチュアである。タイトルの意味は女性たちによる奪い合いコンクールといったところである。

この頃のヨーロッパで巻き起こったリスト・フィーバーはまさに社会現象と言うべき凄まじいものだった。ドイツの作家アレクサンダー・フォン・シュテルンベルクは、この馬鹿げたとしか言いようのない熱狂は、芸術史の本よりは、病歴報告書の1ページとしたほうがふさわしいと呆れたが、それは演奏会と言うより狂乱騒ぎそのものだった。



彼女達の熱狂ぶりをいくつか紹介しよう。リストの前にひざまずき、指先にキスさせてもらえるよう許しを請う女性がいるかと思えば、別の女性は、彼の紅茶カップにあった飲み残しを自分の香水瓶に注いだという。あるロシアの淑女たちは船で旅立つリストを見送るためだけに、大型汽船を楽団付きでチャーターしたという。

きわめつきは、南フランスの港湾都市マルセイユでの話である。ここでは、かつて栄華を極めたプロバンス王国を再建し、リストとその子孫を王座に据えようという話まで持ち上がったというのである。

それにしても、改めて驚かされるのは、彼女達が本当に失神してしまったことだ。ドイツの詩人で辛辣なジャーナリストでもあったハインリッヒ・ハイネは、このリスト現象の謎を解明すべく、女性たちのヒステリックな症状について、婦人科の医師に原因を訪ねた。その回答は、感応磁気、電気感応、電流、無数のロウソクが灯り、香水をつけて汗臭い数百人の蒸し暑いホール内での接触感染、演劇性でんかん、更にはトリック現象、音楽薬効、その他、口に出来ない様々なことだったという。

ビートルズ、クイーン、マイケル・ジャクソンらは、失神する女性ファンを続出させた現代版リストとも言うべきスーパースター達だが、この失神は、コンサートという密着状態で観客同士が身動き出来ない中、極度の興奮状態から呼吸と運動量のバランスが崩れた過呼吸が原因と思われる。

逆に浅い呼吸しか出来ないために失神するケースもある。ヨーロッパの古典文学には、淑女が失神するシーンが数多く登場する。これは、当時の上流階級の女性たちが着用したコルセットが原因と考えられる。彼女たちはウエストを締めすぎて浅い呼吸しか出来ないために、常に貧血状態で、刺激に弱かったと言われている。

<https://www.cherry-piano.com/posts/6777341/>



<https://www.cherry-piano.com/posts/6777341/>

なお、訪れる各都市のプロデューサの負担は、リサイタル故に軽くなるから、ベルリオーズが苦勞したオーケストラや合唱団のための多額のコンサート資金の調達がなく

なる、という利点もあった。

この8年間のツアーは、北はペテルブルグから南はジブラルタルまで、東はモスクワから西のロンドンまで股にかけての大演奏旅行であり、訪れた都市や町は260を超えた。彼の手取り収入は、1600フローリン/回（約640万円/回）だったという。また、1841年12月から翌年3月のベルリンでの独奏会では、21回にわたり80曲を披露して熱狂的な絶賛を浴びたという伝説が残っている。

1847年、ツアー最後の年であるが、ウクライナのキエフでの演奏会のあとに、100ルーブルの寄付金を申し出た令夫人、カロリーヌ・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人と親しくなる。彼女は28歳、フランツは35歳で、冷え切っていたマリー・ダグー夫人の後釜として、第二の愛人関係ができあがった。ただし、彼女はマリーとは正反対に、驚異的な博識を持ち、かつはなはだ聡明であり、作曲に没頭したいフランツを大いに支援する存在になって行くのだった。ただし、ウクライナに莫大な父の遺産を継いで、ウクライナでは最も裕福なカロリーヌでもあったことと、カトリック信者だったため、なにやかにやと、夫であるザイン＝ヴィトゲンシュタイン侯爵との離婚問題を延々と引き摺ることになる。



[https://ja.wikipedia.org/wiki/カロリーネ・ツー・ザイン%EF%BC%9Dヴィトゲンシュタイン#/media/ファイル:Carolyne\\_von\\_Sayn-Wittgenstein\\_1847.png](https://ja.wikipedia.org/wiki/カロリーネ・ツー・ザイン%EF%BC%9Dヴィトゲンシュタイン#/media/ファイル:Carolyne_von_Sayn-Wittgenstein_1847.png)

### 【ワイマール宮廷楽長時代：1848年～】

さすがに、8年間のツアー行脚に飽いたフランツは、1848年、ワイマールというバッハゆかりの文化町の宮廷楽長を拝命して、宮廷の儀典や作曲に資することにした。彼にとっての一番の魅力は、宮廷楽団を監督して指揮できることであり、オーケストラに関する己のレパートリーと管弦楽手法の造詣を深めたいという志望にかなった。



年俸は小さな公国ゆえに、

330～1600ターラー≒46万円～220万円（1ターラー≒1400円）

と年毎にぶれる額で、低すぎたが、稼ぎはいつでもリサイタルやコンサートで補えるという確固とした自信があった。マラソン・ツアーの経験は、こういった経済的な問題にこそ、強みを発揮していた。

そんなことよりも、フランツの企画には、音楽家たちを集めてコンソーシアムを造るという魂胆もあった。その拠点としてはドイツ中央部にある町＝ワイマールゆえに、絶好の文化的社交場になりうるという好条件に魅かれた。彼は、マラソン・ツアーで疾走しているうちに、各地の埋もれた楽才や若い音楽家たちに何とか道を開きたいという布教者のようなビジョンを抱くようになったものと推察できる。やがて、ローマのバチカンに詣でて、そこに定住し、キリスト教にかぶれていくのだが、作曲家という真正芸術家の道から次第に離れて、オラトリオなど宗教音楽の創作にはまっていってしまうことで、私たちは、フランツの限界を知ることになる。

一方、ワーグナーの『ローエングリン』を1850年にワイマールで世界初演したこと、つづけて次年に『タンホイザー』も上演したことはフランツの業績としては一番とだろう。1852年には、ベルリオーズ音楽祭を開催して、パリで不評だった『ベンベヌート・チェルリーニ』のほか、『ロミオとジュリエット』、『幻想交響曲』などを上演して好評を博し、ベルリオーズとの信愛の情を深めた。

そういったプロパガンダが功を奏し、次第に全欧州からの注目を集めて次々と音楽家が訪ねてくる状況になった。しかして、1851年、「**全ドイツ音楽協会**」を主宰し、

以後、25年間にわたり会長を務めることになった。コンサートやリサイタル開催のほか、教育に力を注ぎ、フランツの弟子は20人以上も自然に集まった。しかし、指導料は一切取らず、徹底して無料にしたこともあって、有象無象の弟子と認識していないふらち不埒な連中も集まり、最大で400人ほどになったと伝え聞く。

その中でも、指折りの弟子は、ハンス・フォン・ビューローというピアニスト・指揮者であろう。ワーグナー楽劇の指揮、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番の初演、ブラームスの交響曲の指揮などで勇名を馳せる。フランツの娘コジマと結婚するが、数年してコジマは悪魔のような巨神兵ワーグナーと駆け落ちしてしまう。捨てられたビューローは、リストとワーグナーの「新ドイツ派」から離れて、敵対するブラームスに近づいていくことになるのだ。娘コジマの事件をフランツは快く思ったはずはなく、一時期、ワーグナーとは袂<sup>たもと</sup>を分かちことになる。

フランツの意欲は、ワイマールの管弦楽団と作曲時間を手にしたことによって、かねてからの構想として「**標題音楽**」に焦点を当ててその創作に没頭した。ベートーヴェンの『田園』からベルリオーズの『幻想交響曲』を経て、それらをピアノ曲に編曲することによって自然に、標題に<sup>こだわ</sup>拘ることになったのだ。すなわち、

標題は、作曲家自らの想念の方向性と、題材を理解するための視点を明示できる。

標題音楽は、動機の反復、変遷、変化および転調は、詩的想念に沿って決められる。という結論に達した。ここでいう「詩」とは、古来からの叙事詩を指す。1849年から1958年頃までに、13曲の**交響詩**“Symphonic Poem”を作った。ただし、交響詩には楽章構成は無く、単一楽章の管弦楽曲であり、内容的にはソナタ形式における「提示」、「展開」および「再現」という形態<sup>ふえん</sup>を敷衍した部分構成はみられるが、標題展開に沿ってそれらは極めて柔軟に構成される。

この概念は、やがてR・シュトラウスの交響詩『英雄の生涯』などの名曲に花を咲かせ、あるいはスメタナの交響詩『モルダウ』が含まれる連作交響詩『我が祖国』に結実していくのである。

フランツは、まさに、歴史的な貢献を見事に成し遂げたのだ。

## 【ローマ時代：1861年～】

ワイマールの町に飽きた。加えて、宮廷劇場における演劇部門が威張り始めて勢力を伸ばしすぎて、音楽部門が狭められたことも嫌になった。<sup>あるじ</sup>主のアレクサンダー大公は彼を引き留めようとしたが、フランツの宮廷楽長の辞意は固く、1859年、辞職願を提出した。

宗教音楽に凝りだしたフランツは、ローマのカトリック総本山のバチカンに憧れた。加えて、愛人のカロリーヌがローマに離婚の直訴に出かけた。彼女もカトリックだから、



離婚はできないが、最初の結婚は親たちによる無理強いだったことから、無効であると訴えたのである。それもフランツと正式に結婚したく熱望したことが基になっていたが、<sup>はかど</sup> 渉らず、延々と、10年以上も執拗にクレームする。結局は実らなかった。

しかしながら、この聡明なカロリーヌは親からの膨大な遺産を相続していたから、生活はびくともしない。それよりもフランツの作曲活動への支援に身を捧げつづけた。博識で裕福な女傑としてはめずらしい。ショパンを使い古して捨て去ったジョルジュ・サンドとは、雲泥の差ほど違う。フランツは、このカロリーヌと一緒にローマに定住することにした。

なんと、フランツは、カトリックの聖職位を志望して、なんとか下級職に叙階された。

そして、ミサやオラトリオの作曲に熱をいれたが、音楽史を揺るがすような作品には達し得なかった。しかしながら、いつものようにピアノ曲だけは名曲を残すことになる。例えば、『巡礼の年：第3年』における《**エステ荘の噴水**》は、ローマのフランツを訪ねてきた22歳のドビュッシーを驚嘆させ、印象派の先駆けともなった傑作である。この出来事こそ、フランツの純音楽的才能が如実に現れた最後の灯ともいえよう。宗教音楽など止めておけば良かったのだ。いまさら、バッハの『マタイ受難曲』や『ロ短調ミサ曲』、ひいてはヘンデルのオラトリオ『メサイア』に肩を並べることは、私たちにも想像すら浮かばないのだから。そんなこと、出来ると信じている本人は気付かないのが世の常である。

#### 【晩年：1881年～1886年 バイロイトにて74歳で世界】

よりを戻していたワーグナーが1883年に、ヴェネツィアで客死した。70歳である。その前年に彼の最後の楽劇あるいは聖楽劇ともいう『パルシファル』のバイロイトにおける初演に招待されたフランツは、4回も観劇し、ときには指揮棒をとった。さらに、娘のコジマと孫たちに囲まれ、幸せに過ごしたという。

ワーグナー<sup>あと</sup>亡き後、バイロイトの町がフランツの存在を必要としていたから、フランツはそれに応じて面倒をみたが、度重なる遠征による疲れが溜るとともに、寄る年波には勝てず、1886年（74歳）、肺炎で他界した。コジマは夫の死後、必死に細腕でバイロイトの音楽祭や催し物を運営していたため、父の臨終を枕元に看取れなかったが、父の大往生に感動したにちがいない。

歴史的には、一時期、バイロイト祝祭音楽祭は途絶えたが、フランツの孫や曾孫たちが持ちこたえ、見事に復活させて、今に至っている。

## バイロイト祝祭劇場



<https://www.travel.co.jp/guide/article/29071/>

バイロイトといえば、クラシックファンの中では歴史あるオペライベント「バイロイト音楽祭」の街として名が知られている。ザルツブルク音楽祭と並んで二大音楽祭の 1 つともいわれているバイロイト音楽祭の会場「バイロイト祝祭劇場」はオペラファンの憧れの劇場となっているだけではなく、ドイツの音楽家ワーグナーの熱狂的ファン“ワグネリアン”にとって死ぬまでに一度は訪れたい聖地ともなっている。

両サイドに緑豊かに広がる光景を眺めながら美しい木立が生え伸びる緩やかな坂道を上るとその先に姿が見えてくるのがバイロイト祝祭劇場。最大限の力を注いで作ったとされる『ニーベルングの指環』を構想どおりに上演したいというワーグナーの想いの基でこの劇場は作られた。

<https://www.travel.co.jp/guide/article/29071/>



## 演奏会場： バイロイト祝祭劇場



<https://mainichi.jp/articles/20180905/org/00m/200/001000d>

バイロイト。その街の名前は、オペラファンのみならずクラシックファンにとって特別な響きを持つ。リヒャルト・ワーグナー(1813~1883年)が、自分のオペラだけを上演するために建てた特別な劇場がある街なのだ。人口7万3000人のさして特徴もない田舎町なのに、ワーグナーがこの街に白羽の矢を立てたおかげで世界的に有名になってしまった。何しろ駅のホームから、「緑の丘」と呼ばれる高台の上にそびえる赤い神殿のようなワーグナーの劇場「祝祭劇場 Festspielhaus(フェストシュピールハウス)」が仰ぎ見えるのだから。「お膝元」という言葉が、これほどふさわしい街もないだろう。

自分の作品を「総合芸術」と位置づけたワーグナーは、社交場と化していた当時のオペラハウス(桟敷席では観客が上演中もおしゃべりに興じ、ホワイエでは賭博が行われていた)で自分のオペラが上演されることに不満を抱き、自作だけを上演する「祝祭」の場を求めていたが、パトロンだったバイエルン国王ルートヴィヒ2世の勧めもあって、バイロイトにたどりついた。

<https://mainichi.jp/articles/20180905/org/00m/200/001000d>

## フジコ・ヘミング

フランツ・リストは、彷徨い過ぎたとも言える。しかし、絶えず夢を持つように努めたことは確かである。特筆すべきは、先達の<sup>せんだつ</sup>大家の名作を演奏しながら、欧州各地の同時代の音楽家たちを取捨選択せずにこよなく愛したことであろうか。そのために、彼の作品はバラついたとも言えるのだが、それでも私は、若い時からフランツ<sup>ぶし</sup>節を探していた。

その結果、2010年に、NHKの特集番組で、あるピアニストが弾くフランツ音楽に衝撃的な出会いを果たすことができた。

その人こそ、フジコ・ヘミングという女流ピアニストである。

フジコ（1932年～）は、ドイツ在住のスウェーデン人を父親に持ち、母が日本人の二世である。この両親とは戦前に日本で暮らしたが、デザイナー画家の父の仕事が定着せず、スウェーデンに帰国してしまった。結局は離婚することになったが、フジコは日本で母と暮らし、プロ級の腕前を持つピアニストである母：投網子からピアノの手ほどきを受けて育った。母トアコは、メキメキと才能を伸ばすフジコに興味を持ち、スパルタ教育を施す。そして、娘の演奏技術が己に迫ってくるフジコには、これ以上、手に負えないと悟り、かつての師匠だった名ピアニスト：レオニード・クロイツァーが東京に定住していたので、弟子入りさせようとしたが、嫌がられた。ところが、フジコの演奏を聴いた途端に、クロイツァーの眼が輝いた。フジコは、まさにダイヤモンド原石だったのだ。めでたく無償でレッスンを受けることができた。今なら、そこいらの金持ちの令嬢でも、100万円／月になるほどの授業料を払うと親が言っても、断られたに相違ない。

フジコは、クロイツァーの直弟子として可愛がられ、世界レベルの音楽教育が施された。順調に東京芸術大学に進学して、トップレベルで卒業した。28歳になると、母トアコもそうだったように、ドイツへの留学に抱負を膨らませて、ヨーロッパに向かった。ドサ廻りしても余り人気は上がらなかったが、1968年頃、ヨーロッパに進出してきた、ウィーンで活躍していた名指揮者レナード・バーンシュタインの目に止まった。彼の後援により、ウィーンにてフジコのリサイタルが決まった。けれども、その前夜に風邪をひいて高熱にうなされて、求めた薬の処方間違い、聴覚を<sup>うしな</sup>喪ってしまった。11歳頃に中耳炎で右耳の聴力を失っていたから、全く聞こえなくなり、泣く泣く公演をキャンセルしたのである。千載一遇のチャンスを逃した。

さらに、風邪が全快しても左耳の聴力は30%しか回復しなかったようである。傷心と絶望にくれながら、日本に帰国して母トアコと暮らし始め、トアコのピアノ教室を手伝いながら、密かに<sup>かさぶた</sup>瘡蓋だらけの心を<sup>いや</sup>癒した。生活力旺盛な母トアコは、貧しくも<sup>たくま</sup>逞しく懸命に娘フジコを<sup>かば</sup>庇い、なんとか下北沢の家で生き延びた。そんなトアコも90歳で他界して、60歳のフジコは独り取り残されたが、ぼろぼろになりながらも、残された母の遺産のブリュトナー製

のピアノで好きだったリストを弾いていたようだ。なんとか、母のピアノ教室を細々と運営して、母のピアノと一緒に消えそうな命をつないでいた。

3年ほど過ぎた頃、1998年、NHKが教室を訪れて、はるか昔にNHKのピアノ・コンテストで2位になったフジコのその後を取材に来た。その結果、

NHK：E TV特集 フジコ～あるピアニストの軌跡～（1999）

として実を結んだのであった。

それが放送された途端に、<sup>に</sup>俄かに、全国の日本人の心を<sup>わしづか</sup>驚掴みにした。その中心となる音楽こそリストの『ラ・カンパネラ』だった。NHK主催のリサイタルから始まって、引く手数多<sup>あまた</sup>のソロ・コンサートで全国ツアーにフジコは目まぐるしく活躍することになった。

この番組を観て僕までも魅了されたのだが、余りにも長い<sup>ふびん</sup>不憫な淋しい時代は想像を絶する。身寄りも、希望も何も無かったという。ただ、散歩中、近くの教会に立ち寄った際に、

「待っておれ、それは必ず来る。」

という、日めくりの今日の言葉が何故か記憶に残った。結果、**それ**がNHKだったということである。はるか昔のバーンシュタインも**それ**だった。今度は逃すまいと、万全を期した。

人の境遇とは、不思議なものである。フジコはNHKが探さなければ再び世に出る機会は無かったと言えるが、野望を燃やしてやたらに動き回るのではなく、「何かを<sup>かす</sup>微かに待つ」ということで気まぐれな神々の散歩に巡り合ったのだ。日本的女性のつましい運命を感じる。

さらに、フランツ・リストの『コンソレーション（慰め）第3番』と対で録音したショパンの『ノクターン第19番』とともに、たぶん、一人ぼっちの<sup>せまりょう</sup>寂寥の中では弾けず、その時期が「当時」という化石になって、ようやくプロのピアニストとしてステージに立つようになってから弾けたのではないかと想像したい。哀愁というのは、その人がその最中に感じることはできないはずだ。耐乏の時代を、いとしさで<sup>あ</sup>愛でるような、そんな演奏である。しかも、表現される音の粒立ちとダイナミズムが日本人離れして美しいから、なおさらに僕たちの心を惹きつけるのかもしれない。

%%%

私たち日本人にとってフランツ・リストを語るには、フジコ・ヘミングを掲げなければならぬまい。私のクラシック鑑賞の旅でも、リストに触れた機会は少ないのだが、この巡礼に当たってもフランツの知識が余り多くない。そのため、彼の伝記本を探したら、なんと日本で発行されているのは、音楽之友社のシリーズが1冊だけである。それほど人気がなかったのであろう。あまりにも淋しい。これは、彼の作品がピアノに偏ったのであろうと思ったが、ピアノだけに人生を捧げたショパンは、10冊以上もある。この違いは、何によるのだろうか

か。この巡礼における大きな課題でもある。

その疑問に一石を投じたのが、まさに、フジコ・ヘミングだったのだ。

フジコ・ヘミング／ラ・カンパネラ1973(41歳)



<https://www.hmv.co.jp/en/productitemstock/stock/3519937?>

フジコ・ヘミング 2018.6.15(86歳)  
「自分の音は、作るものじゃなく自然に出てくるもの」



<https://dot.asahi.com/aera/2018061300027.html>



<https://spice.eplus.jp/articles/159181>

1999年、NHKのドキュメンタリー番組で、波乱に富んだ半生と、魂の熱き演奏が取り上げられ、一夜にしてスターダムにのし上がったイングリッド・フジコ・ヘミング。

あれから18年、彼女の喜怒哀楽に裏打ちされた「魂の演奏」が、ここまで多くの人を魅了し、支持を集めてい



ることに驚いている。確かに、アンチも多い。テクニック至上主義こそがクラシック音楽だと信じるクラシックファンには、彼女のゆったりしたテンポ設定や、時折見せるミスタッチは許せないらしい。

## ラ・カンパネラ

『ラ・カンパネラ』はイタリア語で「鐘」という意味である。この曲はヴァイオリニストのニコロ・パガニーニが作曲した『ヴァイオリン協奏曲第2番ロ短調Op. 7、第3楽章 ラ・カンパネラ（鐘のロンド）』をもとにフランツ・リストがピアノ用に編曲した。

この曲はフランツが何度も改訂した

### 《パガニーニによる大練習曲》第3番『ラ・カンパネラ』(S.141-3)

[https://www.youtube.com/watch?v=QssJ23iZE\\_s](https://www.youtube.com/watch?v=QssJ23iZE_s)

として整えられたのだ。

実は、

### 《パガニーニによる大練習曲》第6番「主題と変奏」

(S.141-6)

<https://www.youtube.com/watch?v=RQHelxYug8I>

こそ、以後の作曲家たちが、我こそはと挑んだ名曲なのである。特に、ブラームスとラフマニノフの編曲は出来過ぎて、フランツ・リスト版の影が、若干、薄れている。ラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲（24変奏）」は、ピアノ協奏曲のように管弦楽の伴奏が付いている。その**第18変奏**こそ、

<https://www.youtube.com/watch?v=n17M8W04qwc>

広く世に普及した絶品である。映画、TVコマーシャルなどあらゆるメディアで使われてきたから、誰しも聴いてみて驚愕するはずの逸品にちがいない。しかし

ながら、曲だけ聴いて「そうだったのか」という感慨だけでは、創作したラフマニノフに失礼である。題名ぐらいは、憶えて欲しいものだ。70歳頃のフジコは、これら第3番も第6番も、これが超絶技巧かと思えないほど、まるやかに弾いている。完全に自分のものにしたという自信がうかがえる。数百回も弾いてきたのであろう。

ニコロ・パガニーニ



<http://mizukawa-t.sakura.ne.jp/ongaku-zuisou/paganini/paganini.html>

<https://www.nhk.or.jp/lalala/archive130810.html>

### モテすぎる魔術師

19 世紀、パリの貴婦人たちをとりこにしていた一人の天才ピアニストがいました。神の手を持つとまで言われた音楽家、フランツ・リストです。鍵盤の上で、すさまじい速さで動く指、しなやかで強い手首。オーケストラにも対抗できるようなダイナミックな演奏と超絶技巧で「ピアノの魔術師」と呼ばれていました。目を見張るような演奏に加え、イケメン!という評判はヨーロッパ中に広まりました。中でも熱烈なファンたちは「リストマニア」と呼ばれ、現代のスターたちも驚くようなエピソードがいくつも残っているほどの人気ぶりであった。

### あの鐘を鳴らすのは…

リストの名曲「ラ・カンパネラ」。実はこの曲、3 回作られた作品。そこには、3 人の人物との出会いが影響していました。まず一人目は、天才ヴァイオリニストと呼ばれたニコロ・パガニーニ。彼の作品に感動し、ピアノ曲にアレンジしたのが「ラ・カンパネラ」第 1 稿。そして第 2 稿に導いたのが社交界を代表するマリー・ダグー伯爵夫人だった。二人で訪れた小さな街の教会の鐘が作品に影響を与えたと言われている。さらに、第 3 稿に導いたのがカロリーネ・フォン・ザイン・ワイトゲンシュタイン侯爵夫人。ピアニストとして人気絶頂でありながら自分の進むべき道に悩んでいたリストに「作曲家として音楽に向き合うべきだ」と助言する。リストは 36 歳の時にピアニストとしての活動にピリオドを打ち、作曲活動に専念。そして第 3 稿が生まれた。

<https://www.nhk.or.jp/lalala/archive130810.html>



## フランツ・リスト 《パガニーニによる大練習曲》(S. 141) <<https://enc.piano.or.jp/musics/982>>

その技巧のあまりのすさまじさのために「悪魔に魂を売った」と言われたヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、パガニーニ(1782-1840)。リストがその演奏を初めて聴いたのは、1832年、21歳の時であった。そのとき、感激のあまり、自分は「ピアノのパガニーニになる！」と叫んだというのは、有名な逸話である。この衝撃的な出会いは、ピアノ史上に革新的な作品を生み出すことになった。

まず、リストは、パガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番の終楽章を基に、《「鐘」によるブラヴェーラ風大幻想曲》(S. 420)を作曲した。これは、のちの《パガニーニによる超絶技巧練習曲集》(S. 140)、そして《パガニーニによる大練習曲》(S. 141)の第3曲『ラ・カンパネラ』の原形となった曲である。

そして、1838～1839年にかけて作曲された《パガニーニによる超絶技巧練習曲集》において、リストのパガニーニ研究の成果は一応の完成をみる。しかし、ここで納得するようなリストではなく、1851年に大幅に手を加え、《パガニーニによる大練習曲》と名付けて改訂版を出版した。

リストはパガニーニの楽譜を、ただピアノ用に編曲したわけではない。上述の宣言どおり、パガニーニがヴァイオリンという楽器で実現した高度なテクニックを、ピアノ独自の語法によって表現しようと試みている。そこから新しい語法や技巧が編み出されることとなり、結果として非常に革新的で、類い稀な難易度の高さを誇る作品が生み出されることとなったのである。さらに、《パガニーニによる大練習曲》への改訂においては、簡潔なテクニックによる表現の洗練が目指された。この改訂により、各曲は「練習曲」から「キャラクター・ピース(性格小品)」へと、その装いを変化させている。

第1曲 『トレモロ』(ト短調)は、パガニーニの《24のカプリース》第5番を原曲とする序奏と終結部、同じく《24のカプリース》の第6番を原曲とする主部からなる。

第2曲 『オクターヴ』(変ホ長調)は、《24のカプリース》第17番による。いわゆる「リストの半音階」と呼ばれる、左右交互の手で取り分ける半音階が見られる。

この曲集中もっとも有名な

**第3曲 『ラ・カンパネラ』**(嬰ト短調)は、パガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番ロ短調の第3楽章を原曲とする。この第3曲に関しては、《大練習曲》の初版である《パガニーニによる超絶技巧練習曲集》の第3曲とは大きな違いがある。初版ではパガニーニのヴァイオリン協奏曲第1番ニ長調からの素材が目立つのに対し、《大練習曲》では、第1番の素材はまったく見られない。

フジコフジコの演奏は、これを原点にしている。

第4曲 『アルペッジョ』(ホ長調)の原曲は、《24のカプリース》第1番。この曲も、初版と改訂版が大幅に違っている。改訂版の楽譜は、ヴァイオリンと同じく1段譜になっており、初版に比べると、パガニーニの原曲に非常に忠実な編曲となっている。

第5曲 『狩り』(ホ長調)は、《24のカプリース》第9番を原曲とする。初版に比べると、やはり《大練習曲》のほうが軽快な音楽となっている。曲の中間部には、ピアノ史上比較的珍しい重音のグリッサンドが見られる。

**第6曲 『主題と変奏』(イ短調)**は、パガニーニ《24のカプリース》の中でも最も有名な第24番を原曲とする作品。リストのほかにも、この主題を基に、ブラームス、ラフマニノフ、シマノフスキ、ルトスワフスキなど、多くの作曲家が変奏曲を書いている。原曲は11の変奏と終結部からなるが、リストもこの構成を踏襲しており、この第6曲は11の変奏とコーダからなっている。<<https://enc.piano.or.jp/musics/982>>

[http://pietro.music.coocan.jp/storia/paganini\\_24capricci.html](http://pietro.music.coocan.jp/storia/paganini_24capricci.html)

## ヴァイオリン独奏曲「24の奇想曲 Op.1 24Capricci Op.1」

### <パガニーニについて>

ニコロ・パガニーニは、青年期を古典派時代(1750-1820)に培われ、ロマン派初期に活躍した。誰よりも早くロマン派(1820-1900)へと身を転じ、新しい時代の姿を現していった。当時イタリア音楽は西欧の中では突出した存在であった。さらにイタリアは群を抜いてすぐれたヴァイオリン音楽を形成していた。そうした中でパガニーニがカリスマ的大演奏家・作曲家となるのは、当然といえば当然であり、大きな功績を残していく。また彼の時代のイタリア音楽は、西欧では先進的な存在であった。とりわけイタリア・オペラはすぐれたものでした。それゆえか、ヴァイオリン音楽でベル・カント世界を展開したともいわれる由縁でもある。彼の音楽家としてのタイトルは先ずヴァイオリニスト、そしてヴィオリスト、ギタリスト、作曲家ということになる。



ニコロ・パガニーニ (1782-1840)

パガニーニがヴァイオリンを弾きはじめたのは5歳頃、1799年以後にはイタリア各地へ演奏旅行し、たいへんな名声を得ていく。11歳で公開演奏会を開き、この頃より作曲も正式に学びはじめている。13歳の時、やり尽くしたためかヴァイオリンの教材が無かったといわれている。この時から自作、つまり自分で開発した新しい技法を身につけ、実現するための練習曲を作曲していく。「24の奇想曲 Op.1」もこうした研究のための新しい演奏技術を開発する練習曲の面が大きいようである。

1828年より外国での演奏会を行い、ウィーン、ベルリン、パリ、ロンドンで爆発的なセンセーションを起こし、ヨーロッパ中に名を馳せる。何よりも多くの作曲家に大きな影響を与え、示唆とインスピレーションを注ぎ続けた。一例をあげるとリスト(1811-86)には作曲する演奏家の姿を指し示した。またパガニーニのヴァイオリン演奏技巧が、悪魔に魂を売り渡した代償として手に入れたものと言いつらされていく。

### <「24の奇想曲 Op.1」の構成>

24の奇想曲 24 capricci		備考
1	ホ長調 アンダンテAndante	2/4拍子 跳ばし弓のアルペジオ奏法 ⇒メンデルスゾーン「VI.協奏曲」第一楽章カデンツァに影響 リスト「パガニーニによる絶技巧練習曲第4番」に編曲
2	ロ短調 モデラートModerato	6/8拍子 移弦奏法 ⇒シューマン「6つの演奏会用練習曲Op.10-5」に編曲
3	ホ短調-ホ長調-ホ短調 ソステヌート〜プレスト〜ソステヌート Sostenuto-Presto-Sostenuto	4/4拍子-3/8拍子-4/4拍子 3部形式=オクターヴ重音と至難のダブルトリル〜16分音符での流れるような音群〜オクターヴ重音と至難の二重トリル ⇒シューマン「6つの演奏会用練習曲Op.10-6」に編曲

4	<b>ハ短調</b> マエストーゾMaestoso	2/4拍子 3度重音奏法 優雅な主題と32音符の早いパッセージが混じる ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの演奏会用練習曲Op.10-4」に編曲
5	<b>イ短調</b> アジタートAgitato	4/4拍子 前奏と後奏はレガート奏法によるアルペジオ。中心部はサルタート奏法による無窮動 ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-1」に編曲
6	<b>ト短調</b> レントLento	2/4拍子 トレモロと重音奏法 ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの演奏会用練習曲Op.10-2」 <u>リスト</u> 「パガニーニによる絶技巧練習曲第1番」に編曲
7	<b>イ短調</b> ポサートPosato	6/8拍子 オクターヴ重音と中心部は、音階的パッセージやスタッカートによるアルペジオ
8	<b>変ホ長調</b> マエストーゾMaestoso	6/8拍子 ABABA構成。A=オクターヴ重音と音階。B=16音符の細かいリズムと全音符によるゆったりした旋律との対比がある
9	<b>ホ長調</b> アレグレットAllegretto	2/4拍子 ABACAの小ロンド形式。重音(長3と6度)の重音奏法。フルートとホルンのかけ合いを模したと記している ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-2」 <u>リスト</u> 「パガニーニによる絶技巧練習曲第5番・狩猟」に編曲
10	<b>ト短調</b> ヴィヴァーチェVivace	6/8拍子 16分音符のスタッカートとトリル ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの演奏会用練習曲Op.10-3」に編曲
11	<b>ハ長調</b> アンダンテ〜プレスト〜テンポ I Andante-Presto-Tempo I	3/4拍子-2/4拍子 3部形式。第1部分は重音。第2部分3連符によるリズム的な部分。第1部分に戻っていく ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-3」に編曲
12	<b>変イ長調</b> アレグロAllegro	4/4拍子 D線とG線による幅広い跳躍音程を、レガートに弾く奏法 ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの演奏会用練習曲Op.10-1」に編曲
13	<b>変ロ長調</b> アレグロAllegro	6/8拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部は3度重音下降音型の主題は「悪魔の微笑み」の俗称をもつ。中間部は16分音符による広い跳躍とオクターヴの半音階進行 ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-4」に編曲
14	<b>変ホ長調</b> モデラートModerato	2/4拍子 A行進曲風の旋律・リズムで3重音・4重音奏法で表現される
15	<b>ホ短調</b> ポサートPosato	6/8拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部はオクターヴ重音のシチリアーノ風の主題と変奏、スタッカートによる広い音域を音階的に上行する音型
16	<b>ト短調</b> プレストPresto	3/4拍子 16分音符による無窮動。ノン・レガートレガートを弾き分ける。スモルトツェンドとアクセントの変化などの技巧が発揮される ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-6」に編曲
17	<b>変ホ長調</b> ソステヌート〜アンダンテSostenuto-Andante	4/4拍子 ダ・カーポの3部形式。華麗な装飾音に彩られている。同音を2つの弦で弾けるのはヴァイオリンとヴィオラのみが可能であるが、それを作曲者はみせつけている ⇒ <u>リスト</u> 「パガニーニ練習曲による絶技巧第2番」に編曲
18	<b>ハ長調</b> コレンテ〜アレグロCorrente-Allegro	6/8拍子〜4/4拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部はG線のみで弾かれ、中間部はスタッカートの3度重音による連続進行を多用
19	<b>変ホ長調</b> レント〜アレグロ・アッサイLento-arllegro assai	4/4拍子 序奏+3部形式。短い序奏=オクターヴ重音による。第1部はE線と他の弦との対話。第2部はG線のみで弾く ⇒ <u>シューマン</u> 「6つの練習曲Op.3-5」に編曲
20	<b>ニ長調</b> アレグレットAllegretto	6/8拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部はDによる持続低音の上に旋律。中間部は各拍にトリルがついた16分音符による音階的なパッセージで彩られている

21	<b>イ長調</b> アモロソ〜プレストAmoroso-Presto	4/4拍子 短い序奏の後、第1部アモロソは6度の重音によるあま い旋律。第2部は16音符の音階的パッセージを、跳ばし弓で弾いて いく
22	<b>ハ長調</b> マルカートMarcato	6/8拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部は6度・3度・10度の重音。第 2部はニ短調となり、16分音符によるマルテラート奏法
23	<b>変ハ長調</b> ポサートPosato	6/8拍子 ダ・カーポの3部形式。第1部はオクターヴ重音と高音域 での半音階的下行音型。中間部はハ短調になり32音符の急速な下 行音型
24	<b>イ短調</b> 主題〜クアジ・プレスト〜変奏〜終曲 Tema-Quasi Presto-variazioni-Finale	2/4拍子 主題=開放弦によってよい響きを出している。11の変奏。 アルペジオ、オクターヴ奏法、高音と低音の対比、左手のピッツィカ ート、極端な高音での半音階を用いた変奏を展開。終曲はイ長調と なり、華麗な部分 ⇒リスト「パガニーニによる絶技巧練習曲第6番」に編曲 ⇒ブラームス「パガニーニの主題による変奏曲Op.35」 ラフマニノフ「パガニーニの主題による狂詩曲Op.43」

[http://pietro.music.coocan.jp/storia/paganini\\_24capricci.html](http://pietro.music.coocan.jp/storia/paganini_24capricci.html)

## コンソレーション（慰め） S172 第3番 変ニ長調

<https://www.youtube.com/watch?v=rzJf7KtmS4I>

<https://enc.piano.or.jp/musics/558>

作曲年:1844年 出版年:1850年

マリー・ダグー伯爵夫人と別れたのち、ロシアに演奏旅行をしたリストは、カロリーネ・ヴィットゲン伯爵夫人と知り合い、恋に落ちた。まわりから認められる恋ではなかったが、カロリーネとリストはアルテンブルクで同棲をはじめた。今こそ作曲をすべきだとした彼女のすすめで、リストは作曲に十分な時間を使うようになり、その後 12 年間、リストは、今日の主要とされている多くの作品を生み出した。

この曲の題名は、「慰め」を意味するフランス語(コンソレーション)だが、これはおそらく、サント・ブーヴの同名の詩集から借用したものであると思われる。

ワイマール大公妃マリア・パヴローヴナは、リストとカロリーネの関係に理解を示してくれていたロシア皇帝の妹であるが、リストは、彼女に感謝の気持ちをこめて、この作品を献呈した。

この作品は、リストの作品の中では、技巧的には易しいもので、かつ簡素ではあるが、叙情性にとみ、愛らしさに満ちた魅力的な作品となっている。19 世紀に広く愛された性格的小品集の一つで、リストがショパンの夜想曲からアイデアを得たことは明らかであろう。

第 1 番 ホ長調 / No.1 E dur

第 2 番 ホ長調 / No.2 E dur

**第 3 番 変ニ長調 / No.3 Des dur**

リストの作品の中でも特にポピュラーなものの一つ。

第 4 番 変ニ長調 / No.4 Des dur

大公妃の作曲したテーマが用いられている。

第 5 番 ホ長調 / No.5 E dur

第 6 番 嬰ハ短調 / No.6 cis moll

大公妃のテーマによったバラフレーズの終曲。

<https://enc.piano.or.jp/musics/558> 執筆者: 和田 真由子

併せて、フジコの「**ショパン:ノクターン第19番**」を聴くと、コンソレーション第3番におけるフランツ・リストの想いが彷彿とするのではないだろうか。

<https://www.youtube.com/watch?v=TGZJLu5HzDI>

## マゼッパ

超絶技巧練習曲の第4曲が『マゼッパ』(S.139-4)である。

超絶技巧と聞いただけで、ゾッとする。誰も寄り付かない。それでも、巡礼するからには避けては通れない。いつの間にか、そのCDを買っていた。アリス=紗良・オットーの演奏である。いつのまにか取り寄せていた。たぶん、うるさいだろうなと思って聴きだしたら、第4曲の『マゼッパ』で耳が止まった。巡礼の楽しみは、想定外の発見にある。こういった未知との遭遇が無くなったとき、私の巡礼は終末を迎えることになる。

フランツは、ヴィルティオーゾ行脚を8年間も続けて、1848年にワイマールに腰を据えてから。作曲に熱を入れた結果、この12の練習曲が産まれた。というより、若い時から3度目の改定を重ねて超絶技巧という名の練習曲を仕上げたのだ。

私の感想は、苦労したんだという感慨と、フランツの才能は、管弦楽に憧れても、やはりピアノ曲に超自然的に発揮されたという結論に至った。演奏技術にひたすらに没頭した結果、この轟絶な練習曲にまとまったということである。青年期にパリで活躍したときに、エラーというピアノ製造業者が、ダブル・エスケープメントという技術を編み出し、1秒間に15回ほど鍵盤を叩いても濁らずにきれいに音を出す仕組みを装備した。これにより、パガニーニのヴァイオリン曲芸に負けないほどの超速打鍵が可能となって、フランツを虜にしてしまったらしい。

とにかく打鍵とピアノ線をたたく槌の運動の間の神経が数倍早くなったから、フランツが思い浮かぶトレモロや弦楽器の連続音に近づくことも出来るようになった。ものと理解できる。

問題は音楽性であろう。哀切感や憂鬱感よりも、苛立つリズム感と爆発的開放感を表現する場合にこそ適合するものと考ええる。いわば速度記号のプレスト(急速に)で表示されるような節において発揮されるものと思うが、フランツの『マゼッパ』ではラウドネスを最高にして、かつ、できるだけ速くというような演奏が求められているのであろう。

だから、それに拘ると音楽性が無視されるから、単なるうるさい雑音に終わってしまうので、演奏は困難を極めよう。そういう意味で、いろいろ聴いてみると、最近の斎藤雅広の演奏こそ、私には原曲の音楽性を見事に背負いこんでいると聴こえる。

それから、フランツのピアノ曲に共通するものは、リズム感と躍動感である。その辺に着目すると、面白くなるし、聴きたいときを選ぶことも重要になる。

%%%%%%%%%



## ダブル・エスケープメント

ピアニストは、ピアノのユーザーである。ユーザー・ニーズに呼応するのはピアノ・メーカーであることは論を待たない。フランツという生まれながらの天才に貢献し、エラールは欧州中に名を馳せた。一方、もう一つのパリのメーカー：プレイエルは、ショパンに入れ込んだ。音色もショパンの好みに合って、ショパンのコンサートもプレイエルはすすんで支援したのである。そんなことも、二人のライバル心を煽ったにちがいない。

ちなみに、現在のショパン国際コンクールにおいても、スタインウェイ、ヤマハ、ファッツィオリ、カワイの4社がコンサート・グランド・ピアノを提供し、コンテストの選定に委ねている。日本の2社も張り切っているが、どうも、選ばれるのはスタインウェイが多く、他を圧倒している。審査員の耳にも馴染んでいるというコンテストの思惑もあるようだ。

当時のピアノ製造技術の粋は、打鍵機構にあったらしい。それがダブル・エスケープメントであった。今はその装備は常識となっている。

[https://www.yamaha.com/ja/musical\\_instrument\\_guide/piano/mechanism/mechanism003.html](https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/piano/mechanism/mechanism003.html)

鍵盤を押すとハンマーが弦を打つというピアノの仕組みをアクションという。

ピアノのアクションの歴史を語る上で欠かせないのが、フランスのエラールによるレペティション機構(ダブルエスケープメント)の発明。レペティションというのは繰り返しの意味。それまでは鍵盤を押すとハンマーが上がって弦を打ち、一番下に降りてから次の打鍵に備えるのが普通だが、このレペティション機構のおかげでハンマーが下まで完全に降りなくても次の打鍵の準備ができるようになった。エラールは1803年に試作器をベートーヴェンに贈り、新たな作品を生み出す力になったともいわれる。この機構が、現代のアクションにも、より洗練されたかたちで受け継がれている。

レバーの動きをよく見ると、ハンマーが途中からまた上がっている。だから連打の時も、きちんと反応して音が出せる。機能上は1秒間に最大15回ほど連打することが可能。

[https://www.yamaha.com/ja/musical\\_instrument\\_guide/piano/mechanism/mechanism003.html](https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/piano/mechanism/mechanism003.html)

## 超絶技巧練習曲 S. 139 R. 2b 第4番二短調「マゼッパ」

<https://www.youtube.com/watch?v=8Ec-L3LDtjk>

## 《マゼツパ伝説》

[http://www.asahi-net.or.jp/~nj8f-tkmt/howard\\_04.htm](http://www.asahi-net.or.jp/~nj8f-tkmt/howard_04.htm)

イヴァン・ステファノヴィッチ・マゼツパ  
(1644－1709)



<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%82%BC%E3%83%91>

イヴァン・ステファノヴィッチ・マゼツパ(1644－1709)は、ポーランド国王のヨハン・カジミール宮廷に使えていた。そこで貴族の夫人と親しくなり、不貞の罪によって、裸で馬に括り付けられ荒野に追放されるという刑をうける。しかし放浪をつづけていると、ウクライナで救われる。マゼツパはそうしてウクライナのコサック兵の一員となり、やがて戦果をあげウクライナの英雄となるのである。

ウクライナは、1648年からポーランドからの独立戦争を行ったが、1650年にベレステチコの戦いで敗れたことがきっかけで、1654年にロシアの宗主権を認めロシア側につくことになる。ウクライナに対するロシアの支配力が強くなった。1700年からはじまる北方戦争において、スウェーデンとロシアの戦争時にウクライナはロシアからの独立戦争をけしかける。1709年のポルタヴァの戦いでピョートル1世率いるロシア軍はスウェーデン軍を破り、ウクライナでの反乱も鎮圧します。

マゼツパが死んだのもポルタヴァの戦いと同年の1709年。

リストがとっても感銘を受けた、フランスの作家ヴィクトル・ユゴーが書いた

### 『マゼツパ』という叙事詩

がモデルといわれている。

[http://blog.livedoor.jp/a\\_delp/archives/1065665282.html](http://blog.livedoor.jp/a_delp/archives/1065665282.html)

リストが作曲した《マゼツパ(ニ短調)》は、直接この絵に感化されたのではなく、文豪ヴィクトル・ユゴーの詩《マゼツパ》に取材したものだということで、超絶技巧練習曲(サール番号:S.139)の第4曲として作曲され、また、交響詩にもなっています。とは言え、バイロンの叙事詩にもあるような物語を想起させるダイナミックな音楽になっていて、部分的に三段譜で書かれた超絶技巧を要する一曲です。かつて、「のだめカンタービレ」でも登場したので、クラシック音楽ファンでなくとも馴染み深い曲となっているのではないのでしょうか。

冒頭の力強い和音に続く序奏が、マゼツパの豪快で奔放なイメージを描き出し、三段譜が始まることから、マゼツパのモチーフが右手で奏でられます。

この二段目の三度で形成される音形は、馬を駆るリズムを構成しているようでもあり、主題のマゼツパの豪快さ、あるいはバイロンの叙事詩のようにマゼツパを縛り付けた馬の疾走をも想像させます。この荒々しい展開がひと段落すると、音楽は一転し、変ロ長調へと転調してゆったりと幻想的に流れます。マゼツパのモチーフは左手に移り、右手がそれを華麗に装飾します。ひと時の安息、あるいは、馬にくくりつけられて追放され力尽きた後に娘に発見される場面のような、ロマンティックで甘美な音楽が展開されます。



◇ シャセリオー 気絶したマゼッパを見つける コサックの娘  
1851年

しかし、しばらくするとその嫺かな流れは再び豪壮な音像へと変容し、主調に戻って、さらに跳ねるような勢いをも得て荒々しさを増してゆきますが、その後、今度は内心の微かな不安を表すかのように再び音楽は静まりかえり、しかし、それを打ち消すかのように二長調に転じた強引ともいえる強烈なフィナーレを迎えます。

[http://blog.livedoor.jp/a\\_delp/archives/1065665282.html](http://blog.livedoor.jp/a_delp/archives/1065665282.html)

## 超絶技巧練習曲 S. 139 R. 2b

<https://enc.piano.or.jp/musics/550>

作曲年:1851年 出版年:1852年

この曲集の原型は1826年頃「すべての長短調の練習のための48の練習曲」として実際に作られた12曲がパリで出版されたものであり、その後1838年に「24の大練習曲」として(実際に書かれたのはやはり12曲)、計2度の改訂を経て最終的に1851年「超絶技巧練習曲集」として完成した。調性はハ長調から始まって平行短調を添えて五度圏を逆回りして変口短調で終わっている。ただし標題は初めから意図されたものではなく、出版する際にリスト自身か出版者によって付けられたものである。ヴィルトーゾとしてヨーロッパ中を風靡したリストの名技を後世に伝える傑作だといえよう。

### 第1番 ハ長調「プレリュード」 / C dur "Preludio"

ハ長調。たった23小節しかないが、その中にはあくまで即興的な様々なモチーフが盛り込まれている。前代未聞の壮大な練習曲集の幕開けにふさわしい華やかな作品である。

### 第2番 イ短調(標題なし) / a moll

イ短調。10番と共に標題が付けられなかった2曲のうちの1曲だが、冒頭の「A capriccio(気まぐれに)」が曲の雰囲気をよく表わしているだろう。若い頃の旧作が改訂されたためもあり、燃えるようなテンペラメントとスタッカートが多用された歯切れのよい曲である。

### 第3番 ヘ長調「風景」 / F dur "Paysage"

ヘ長調。田園風で静かな一幅の風景画のような曲である。動きの激しい第2番とドラマティックな第4番の間にこの曲を挿入したのは、ドラマと詩的要素のバランスと対比を考慮した上でのことと思われる。中間部「Un poco piu animato il tempo」に入り多少テンポが揺れて音量もffまで高揚するが最後は再びもとの静けさに戻って終わる。

#### 第4番 ニ短調「マゼツパ」 / d moll "Mazeppa"

ニ短調。マゼツパとはフランスの文豪ヴィクトル・ユーゴーの叙事詩「マゼツパ」に現われる英雄である。諸説あるようだがまずこの詩を読んだリストが感銘を受けまずピアノ曲に、そして1851年に交響詩として管弦楽のために書き直し、さらにピアノ曲に書き戻してこの練習曲集に加えられたと思われる。テーマはユーゴーの詩にある「馬に縛り付けられて荒野に放されたマゼツパ」の情景だろう。これはカデンツァを挟んで変奏を繰り返し、最後はニ長調に変わって雄大に終わるが、最後の和音の欄外にはリスト自身の筆跡で「ついに終わった……しかし彼は再起して国王となった」と書かれているのでその喜びの表れだろう。

#### 第5番 変ロ長調「鬼火」 / B dur "Feux follets"

変ロ長調。鬼火が音楽に取り入れられたのは、旅人の道を迷わせたシューベルトの連作歌曲集「冬の旅」からはじまったもので、リストはこの空想的で正体のないものの表現を細密な技巧で試みた。半音階からはじまり重音、跳躍などを駆使した、まさに「超絶技巧」という名にふさわしい難曲である。

#### 第6番 ト短調「幻影」 / g moll "Vision"

ト短調。一説にはナポレオン1世の葬式の幻影だともいわれているが確かではない。曲は重苦しい Lento の主題ではじまりニ長調へ、アルペジオの音型を加えてオクターヴのカデンツァをはさみト長調へととどろき変奏され、リスト独特の絢爛さのまま激しく終わる。

#### 第7番 変ホ長調「エロイカ」 / Es dur "Eroica"

変ホ長調。12歳の時 Op.3 として出版されていたアンプロンプチュの改作。減七和音ではじまるカデンツァ風の序奏に続き「Tempo di Marcia」で堂々とした行進曲風のテーマが現われる。ベートーヴェンの交響曲にもみられるように変ホ長調は英雄的な調性で、標題にふさわしい曲想を持っている。

#### 第8番 ハ短調「荒野の狩」 / c moll "Wilde Jagd"

ハ短調。パガニーニ練習曲中の「狩」とは大きく異なり、こちらは猛獣狩りのように荒々しい。分散オクターヴと付点リズムによる第1主題とはじめ pp で提示される長調の第2主題が変奏と転調を繰り返しながら、最後はハ長調で終わる。

#### 第9番 変イ長調「回想」 / As dur "Ricordanza"

変イ長調。第3番に続き詩的要素の強い穏やかな曲である。いくつかの主題はいずれも即興的で、何度も華麗なカデンツァをはさみながらドラマティックな盛り上がりを見せ、いかにもいろいろな人生のドラマを回想しているような美しい曲である。

#### 第10番 ヘ短調(標題なし) / f moll

ヘ短調。はじめから題名のなかった曲で、何度も改訂を加えて練習曲として特殊なテクニックや書法の盛り込まれた作品となった。冒頭の左右交互の和音によるモチーフは agitato のいらだちを表現し、その後も上行形とため息のような下降形とのモチーフがからみあい、最後まで不安定な印象を残す。

#### 第11番 変ニ長調「夕べの調べ」 / Des dur "Harmonies du soir"

変ニ長調。最低音による鐘の音の模倣と美しい和音による序奏に続き、広い音域にわたるハーブ風の伴奏にのせて魅力的なテーマが現われる。祈りのような「Piu lento con intimo sentimento」をはさみ ff でテーマは繰り返され分厚い和音によって盛り上がりを見せる。平和な夕べに鳴り響く美しい教会の鐘の「調べ」はリストの強い信仰心の表れだろう。

第 12 番 変ロ短調「雪かき」 / b moll "Chasse-neige"

変ロ短調。終始変わらない細かいトレモロは雪が降り積もる様だろう。それに乗せてたった 6 音からなる雪のうたが奏でられる。途中で現われる小さな半音階パッセージは突風だろうか。雪と風は次第に激しさを増し、最後は消え入るように終わってゆく。

## ハンガリー狂詩曲 第2番 S.244

大昔のことであるが、レコード芸術誌の評論を読んで、買ってしまったレコードがある。だいたい、評論家というのは、信用できないということが私の観念である。レコード制作会社と関係があるとか、特定の指揮者は誉めるがそれ以外は軽視するなどという噂が絶えない。それどころか、特選という評価に騙されて買い込んでがっかりしたこともあった。だから、偏向が少ない録音音質の方のコメントも読んでみた。すると、すごい録音だという。そのため、無理して買ったのだった。

下宿に帰ってきて聴いたら、パノラマの如く拡がるソノリティと低音から高音までの分厚いオーケストラに眼も耳も虜とりこにされてしまった。目は関係ないはずなのだが、目の前に管弦楽団がはっきりと見える気がした。安っぽいプレーヤーと、トリオのアンプとスピーカーなど、かき集めのステレオ・セットが、この時ばかりと誇らしげに「どうでしょう！」と私に鳴り響ひびいてみせた。

それが、ストコフスキーの「管弦楽曲集」：1956年であった。その中の  
フランツ・リスト：ハンガリー狂詩曲第2番（ストコフスキー編曲版）  
に痺しびれ、いまだに後遺症が残っており、ときたま禁断症状に嬉しく悩まされてきた。

フランツは、パガニーニの音楽をピアノ編曲することを得意としていたが、まさか、自分以上に上手く編曲できる奴が20世紀に出現するとは思っていなかったにちがいない。しかも、オーケストラである、フランツは、結局、管弦楽曲では音楽史に名を上げるほどの傑作は残し得なかった。墓場の影で、彼の鬼火が地団駄踏んでいるかもしれない。

そして、いつものように、リミックスされたRCA復刻CDが出て、即座に手に入れて、聴けば聴くほどその新鮮さに驚かされている。しかも、レコード会社は当時の人気盤を知っていて、復刻盤を制作したという彼らの慧眼けいがんにも脱帽した。

たぶん、最新録音の最優秀CDも敵わないほどの音響であり、ストコフスキーの編曲と名指揮によるから、音楽性も優れている。現代の録音エンジニアは、どうも音響の醍醐味を知らずに育ってきて、かつ、音楽に疎うとい連中が多いのではないだろうか。

デジタルという技術ばかりに嗜好をもっているのはいいが、音響という超アナログの世界を覗のぞいていないようだ。カラヤンがNHKホールの柿落こけらおとしに來日してベルリン・フィルを振った時に、「残響特性がデッドすぎるからオーケストラが映えない」というようなことをコメントしたそうだ。本拠のベルリン・フィルハーモニー・ホールと比べて発言したのであろう。こういったことに敏感に反応しなければ、一流の録音エンジニアにはなれないと思う。だいたい、世界で著名なウィーン・ソフィエン・ザール、ミラノ・スカラ座、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールなどにおいて、管弦楽団の響きを直に聴きもせず、マイクをいっぱい立てて、デジタルで32チャンネルも音を拾えば何とかなると思っているのではないだろうか。悲しいことではあるが、このストコフスキーによるハンガリー狂詩曲第2番を



聴くだけで、日本と世界の録音技術の限界が露出している。

%%%

### ハンガリー狂詩曲第2番(ストコフスキー編曲版)

<https://www.youtube.com/watch?v=S1YvHyg3z5E>

### ハンガリー狂詩曲第2番(ピアノ原曲) フジコ・ヘミング

<https://www.youtube.com/watch?v=vWrv2tL7iG8>

けっこうポピュラーな傑作である。でも、やはり管弦楽版で有名になったのではないだろうか。とにかく、ハンガリーの舞曲のリズムを採り入れたから、極めて軽妙である。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%AA%E3%83%BC%E7%8B%82%E8%A9%A9%E6%9B%B2>

最初の15曲は1853年に出版され、最後の4曲は1882年から1885年に追加された。のちに一部は管弦楽編曲も行われた。

- 第1番 嬰ハ短調
- **第2番 嬰ハ短調**
- 第3番 変ロ長調
- 第4番 変ホ長調
- 第5番 ホ短調 《悲劇的な英雄の詩》
- 第6番 変ニ長調
- 第7番 ニ短調
- 第8番 嬰ヘ短調
- 第9番 変ホ長調 《ペシュトの謝肉祭》
- 第10番 ホ長調 《前奏曲》
- 第11番 イ短調
- 第12番 嬰ハ短調
- 第13番 イ短調
- 第14番 ヘ短調
- 第15番 イ短調 《ラーコーツイ行進曲》
- 第16番 イ短調
- 第17番 ニ短調
- 第18番 嬰ヘ短調
- 第19番 ニ短調 《「高雅なチャルダッシュ」による》

<http://www.bandpower.net/bpblog/archives/2486>

ハンガリーの有名な作曲家でピアノの名手であったフランツ・リスト(1811-1886年)は、その幼年期に民族音楽に多大な影響を受けた。交響詩やコンサートのための作品、ピアノ練習曲を含む他の多くの作品以外に、彼は1846年から1853年(および1882年から1885年)の間に、哀愁を帯び、卓越した表現力とすばらしいジプシーのリズムによって特徴づけられる19曲のハンガリー狂詩曲を書いた。輝かしい狂詩曲第2番は、ゆっくりとしたセクション(ラッサン)と高速のセクション(フリスカ)で構成され、1851年にピアノ独奏曲として出版された。しかし、コンサートでの絶大な人気により、その後すぐ作られたオーケストラ・バージョンが存在する。

第2番は狂詩曲の中で最も成功を収め、おかげでトムとジェリーやウッディー・ウッドペッカー、バッグス・バニーなど、主に漫画映画の中でさまざまなパッセージが使われるようになった。そのめまぐるしい動きの音楽は、ひじょうに幅広い層に受けている。

## 巡礼の年「エステ荘の噴水」

クラシック巡礼をしなければ聴くことはなかった。極めて落ち着いたピアノ曲で満ちている。聴き始めてから、身構える必要がないもの、あるいは耳がそばだつものが少ないのも解った。

超絶技巧練習曲やハンガリー狂詩曲を書いたフランツ・リストにしては、めずらしく、不思議なくらい落ち着いている。交響曲でいえば、第2楽章のアダージョばかりである。こんな精神状態は、満腹の後の雄ライオンが横になり、アフリカ・ヌー(牛)の肉で膨らんだ大きな腹を無防備に見せて昼寝しているような極楽感もする。

「巡礼の年」は3部に分れている計30ほどの小曲集で、第1年、第2年、第3年と束ねられている。

第1年は、1835年(24歳)～1836年にマリー・ダグー夫人とスイス旅行したときの感傷と印象に基づいているという。これはといった傑作はないが、第8曲の「ノスタルジア」だけは、ある作家が採り上げて少しだけ有名になったものぐらい。ただし、その作家の感覚は、創作の企みでズレているような気がしてならない。

第2年は、1837年から翌年にかけて、再び、マリー・ダグー夫人とフランツが二人で滞在したイタリアでの印象を基にしているというが、第1年と同じような調べに聴こえる。第1年と第2年をスクランブルしてかけたらスイスとイタリアの分別がつかない。ただし、第7曲の「ダンテを読んで(ソナタ風幻想曲)」だけは、リスト的激情に彩られた劇的展開に眼が覚める。また、補遺第3曲の「タランテラ」は、ラ・カンパネラに通ずる躍動感に満ちており、楽しくなる。

### 老齡のリスト

第3年こそ、やっと「巡礼」らしく聴ける曲が揃っている。いわゆるローマ時代1861年(50歳)から1869年にかけて作曲開始されたものである。本作品集の多くは、巡礼したくなる年齢になったフランツの66歳(1877年)に作曲されていた。フランツはこの期間に充実した作曲活動を展開していたことがわかる。

1870年頃より、59歳のフランツは季節ごとにヴェイマル、ブタペスト、ローマの三都市を住み分ける生活を送っていたから、忙しかったはずだが、本来的な創作のインセンティブと靈感が噴き出してきたのだろう。第2曲と第3曲の「エステ荘の糸杉」は味わい深い。

さらに第4曲の「エステ荘の噴水」は絶品である。22歳



<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88>

のドビュッシーがローマの老フランツを表敬訪問して直接聴いて、驚嘆したそうだ。そして、後の印象主義の音楽、例えばドビュッシー(1862-1918)の《水に映る影》や、ラヴェル(1875-1937)の《水の戯れ》などを先取りしたとされている。

このエピソードこそフランツの音楽が印象派に影響した<sup>あかし</sup>証であろう。フランツの音楽は、時代によってバラつくのではあるが、音楽史における最大の功績は、このエピソードが物語っている。芸術は、ベルリオーズやフランツ・リストがベートーヴェンに影響されて育ってきたように、そのような波及刺激によって初めて革新=イノベーションを起こして、次世代に発展・変遷していくのだ。

こういった発掘が、まさに、私のクラシック巡礼の想定外の成果なのである。

%%%

## 巡礼の年 第3年「エステ荘の噴水」 S.163/R.10

<https://www.youtube.com/watch?v=5YaZdHlVx84>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B7%A1%E7%A4%BC%E3%81%AE%E5%B9%B4>

### 巡礼の年 第3年「エステ荘の噴水」 S.163/R.10

#### 第3年

《第3年》(Troisième année, S.163)は1883年(72歳)に出版された。多くはリストが挫折し精神的に憔悴しきっていた1877年に作曲されており、1840年頃にほとんどの原曲があるこれまでの作品集とは40年ほどにもおおよぼ隔たりがある。各曲には晩年のリストの特徴である不協和音やレチタティーヴォ風の単旋律の使用、宗教的・禁欲的な雰囲気ははっきりと表れている。

リストはこの巻に《糸杉と棕櫚の葉》の題を与えようと考えていたことがあったが、糸杉は「喪(死)」、棕櫚は「殉教」の象徴とされている。音楽学者の野本由紀夫は、リストがこれらの楽曲に「死と救済」の思いを託しており、曲集のうち第2,3,5,6曲は哀歌(死)、第1,4,7曲は宗教による慰めの性格を示すとしている。

ティヴォリのエステ家別荘



#### 1. アンジェラス！守護天使への祈り

アンジェラスとは朝・昼・夜に行うカトリックのお告げの祈り、またはその時を知らせる鐘のことで、冒頭に聞こえる旋律がそれである。ダニエラ・フォン・ビューロー(ハンス・フォン・ビューローとコジマの娘、リストの孫娘)に献呈。

## 2. エステ荘の糸杉に I: 哀歌

エステ荘はローマにほど近いティヴォリに建つ城館で、リストはホーエンローエ枢機卿からその教室を貸し与えられていた。1877年にここを訪れたリストは、庭園の糸杉の下で3日間を過ごしながら、「強迫観念に駆られ、枝葉が歌いむせび泣く声を聞き、それを五線譜に書き留めた」。糸杉は「喪」の象徴である。なお、この曲がマリー・ダグー伯爵夫人の死(1876年)を悼んだものだとする説は誤りである。

## 3. エステ荘の糸杉に II: 哀歌

ミケランジェロが植えたと伝えられていた糸杉の印象から作曲されたが、後にそれが誤りであることが分かったため、リスト自身がミケランジェロの名を題名から外している。

## 4. エステ荘の噴水

リストの代表作の一つに数えられ、晩年の作品中ではとりわけ演奏機会が多い。巧みなアルペジオで水の流れを描写し、華麗な曲調が晩年の作品の中では異例とみなされることが多いが、他の作品と同様に宗教的な要素も含んでいる。ラヴェルの『水の戯れ』やドビュッシーの『水の反映』がこの曲に直接的に触発されて作曲されたという点で、フランス印象主義音楽に多大な影響を与えた作品とされる。後年ブゾーニが聞いたところによると、この曲を聴いたドビュッシーはそのあまりに印象主義的な響きに顔色を失ったという。曲の半ばに「私が差し出した水は人の中で湧き出でる泉となり、永遠の生命となるであろう」というヨハネ福音書からの引用が掲げられている。

## 5. ものみな涙あり／ハンガリーの旋法で

「ものみな涙あり」はヴェルギリウスの『アエネーイス』におけるトロイア陥落の場面に現れる一節である。この曲は元々〈ハンガリー哀歌〉という曲名であったことから、トロイア陥落とハンガリー革命(1848-49年)の失敗を重ね合わせて、国に殉じた者たちに捧げた哀歌と考えられている<sup>[4]</sup>。ハンス・フォン・ビューローに献呈。

## 6. 葬送行進曲

1867年に銃殺されたメキシコ皇帝マクシミリアン1世の追悼のための葬送音楽で、皇帝の死後すぐに書かれている。

## 7. 心を高めよ

「心を高めよ(スルスム・コルダ)」はミサの序讃の一節から採られたものである。その名の通り、終曲にふさわしい荘厳な曲になっている。



## 《エステ荘の噴水》



[http://blog.livedoor.jp/a.delp/2017-09-04\\_Liszt](http://blog.livedoor.jp/a.delp/2017-09-04_Liszt)

イタリア・ローマ近郊のティヴォリにある世界遺産《エステ家別荘》でした。イタリア・ルネサンス期の建築家ピーロ・リゴーリオ(1500-1583年)の作になる、噴水尽くしのイタリアー美しいと言われる庭園で知られます。中でも有名なのがオルガンの噴水で、水力で演奏される自動オルガンです。この庭園の全ての噴水は、近くを流れるアニエネ川との高低差だけで水が吹き出す仕掛けになっていて、今風に言えば位置エネルギーを活用したエコな噴水です。オルガンの噴水では、落下した水によって押し出される空気圧をオルガンの鞆に使用し、その同じ水によって回る水車の回転を用いてオルゴール式シリンダーを回し、パイプのバルブの開け閉めを行うという、巧みな仕掛けが施されています。

オルガンで演奏される音楽はルネサンス期のシンプルなものですが、この庭園に着想を得た音楽を作曲したのがリストでした。《巡礼の年》で知られるリストのピアノ曲集は、若い頃から書き留めた曲を集めてまとめたもので、《第1年：スイス》、《第2年：イタリア》、《ヴェネツィアとナポリ(第2年補遺)》、《第3年》の4集に分かれた全25曲から成り、このうちの《第3年》に、エステ荘に関わる曲が3曲あります。

### リスト：巡礼の年 第3年

1. アンジェラス
2. エステ荘の糸杉に I
3. エステ荘の糸杉に II
4. エステ荘の噴水
5. ものみな涙あり／ハンガリーの旋法で
6. 葬送行進曲



## 7. 心を高めよ

リスト(1811 - 1886年)は、自身の革新的音楽への批判にさらされた結果、宮廷楽長の地位を追われ、1865年に、失意の中、ローマで聖職者になります。肖像画等で見かける黒い衣装は僧衣であり、常にあのような衣装を纏っていたそうです。そして、57歳の1868年から晩年の1885年までの毎冬、エステ荘を訪れて過ごしました。この頃から調性が不明確な、半ば宗教性を帯びた重たい楽想が増えてゆき、エステ荘の糸杉に靈感を得た《巡礼の年 第3年》の第二曲目と三曲目は、そういった色調の哀歌となっていて、シリアスな雰囲気をたたえています。しかし、第四曲の《エステ荘の噴水》では、一転して、イタリアの明るい陽光に煌めく水の流れを色彩豊かな音の粒で描き出していて、極めて美しく希望に満ちたリストの代表曲になっています。この曲が、後のドビュッシーらの印象派音楽へ影響を与えたという指摘もあります。

今回、「美の巨人たち」で紹介された庭園の噴水による水の芸術を観るにつけ、その美しさがリストに瑞々しい音楽を奏でさせたことを明確に理解できます。番組では、マウリツィオ・パチャリエット (Maurizio Paciariello) の演奏による映像が流され、軽やかに流麗なタッチでYAMAHAを操る中々良さげな演奏でしたが、残念ながら部分的にしか聴くことが出来ませんでした。番組の時間的編成からして、8分以上かかるこの曲を全て流すのは困難である上に、音楽番組でもないので仕方ないことですが、番組中のBGMに用いても良かったのではないのでしょうか。

従って、ここでは、クラウディオ・アラウの演奏が聴けるように添付しておきます。アラウ独特のゆったりしたテンポが、この曲に合わないかと思いきや、パチャリエットよりもかなり遅いながら、逆にそれによって一音一音が鮮明に浮き上がり、噴水が紡ぐ煌びやかな光の粒がまるで目に見えるかのような色彩をもって聴く者を魅了します。リストは、この曲の自筆譜の片隅に以下の一文を記しています。

「私を与える水は人の中で泉となり、永遠の命への水が湧き出る。」

[http://blog.livedoor.jp/a\\_delp/2017-09-04\\_Liszt](http://blog.livedoor.jp/a_delp/2017-09-04_Liszt)

## エピソード

あれから、どれくらい経ったのだろう。あの時のノートを見ると、私は、2011年にクラシック遍歴として次のように書いていた。

「つい最近、襦袢を着たおばさん、フジコ・ヘミングがNHKに登場してから、こりゃいかんと神経を呼び覚まし、彼女の明解で柔らかな演奏によって初めて、リストの印象をきっちり受け止めることができた。」

フジコが弾くラ・カンパネラを初めて聴いたときの感慨である。「ボロを着たおばさん」とは、何を意味しているのか。まず、普段着であること、次にピアノの音以外飾らないこと、であろうと気付いた。彼女は、母トアコが夢見たフジコの華やかなステージではないイメージを天国の母に見せたかった。でないと、またウィーンであったように、幸運の女神が去ってしまうことを恐れたのだと思う。そして、今年の2月にファミリー・ヒストリーとしてフジコがNHKに再登場した。おそらく87歳になっていた。昨年の外国も含む全国ツアー・リサイタルは、60回を超えたという。すさまじいエネルギーだ。彼女のファンひいてはフランツ・リストのファンは増えるばかりである。

こんな現象にこそ、マラソン・ツアーとして8年間で千回もこなしたフランツは、あの世で微笑しているにちがいない。はっきり言えば、フジコの活躍がフランツ音楽に対する私たちの称賛を呼び起こしたのである。

どうも、フランツのコンプレックスは、21歳のときにパリで出会って衝撃を受けたショパンにあったのかもしれない。どうしても、甘美な哀切きわまりないピアノ曲を上回るものに到達できなかった。あるいは、そんなものよりもフランツらしい激情をあらわした音楽を創ることに燃えた。加えて、顔も見たくない、忌々しいショパンなのだけれども、その彼がポーランド郷愁にくれたように、生まれ故郷のハンガリーの民族性を採り入れたいと考えたのかもしれない。そのショパンのオーラを振り切るためにもマラソン・ツアーに、フランツ自身を駆り立てたのであろう。そのような阿修羅の消耗戦が静まったあと、老齢に達して、何故か、穏やかな風景に枯れた情感を載せるピアノ曲に、ごく自然に近づいていった。あの激しいマゼッパから、「エステ荘の噴水」の水音に落ち着いたのである。

そういった長い人生の果てに書いたものが、ドビュッシーを刺激して新たな音楽の展開に資することになった。その見解に私が到達した結果、フランツを初めてプロファイリングできたと自画自賛している。

それから、巨神兵ワーグナーとの関係については、娘コジマがフランツの血縁を残したのだが、かなり錯綜したことがうかがえる。それは、次の巡礼として詳しく述べていきたい。とにかく、バイロイト音楽祭として、いまでも賑わっているワーグナー神殿が現存している。これについてもフランツは軽視できないほどの貢献を果たしたのであった。

<参考図書等>

No.	題名	著者	発行元
1			
2			
3			
4			
5			
6			